

アンコール遺跡における地域に立脚した考古学と文化遺産教育の実践

Area based archaeology and cultural heritage education in Angkor of Cambodia

丸井 雅子 [1]

Masako Marui[1]

[1] 上智大・外・アジア文化

[1] Inst. of Asian Cultures, Sophia Univ.

本発表は、カンボジアのアンコール遺跡における文化遺産教育の実践について、考古学と地域社会の関わりという視点から紹介することを目的とする。

カンボジアでは、考古学はアンコール研究を支えるひとつの学問分野として出発し、その担い手は主としてフランス人研究者であった。それは20世紀初頭の植民地期に遡る。考古学とはいっても研究対象は地上に残る建造物であり、埋蔵文化財には長い間真の意味での関心は払われてこなかったと言ってよいであろう。

アンコール遺跡群は1992年に世界遺産に登録された。1970年代から20年近い内戦を経験したカンボジアは、アンコール・ワットに代表される壮大な宗教建築を王国復興の鍵として位置づけ、国際的な遺跡救済キャンペーンが展開された。このアンコールは、文化遺産保存の国際協力が成功している好事例としてつとに有名である。

さらに近年の政情の安定は、観光地としての開発を急激に推し進めた。2008年の海外からアンコールへの訪問者数は約963,000人で、カンボジアへの全渡航者数の50.9%を占める(2008年1月から11月期データ、カンボジア観光省発表)。前年同時期と比べると7%近い増加率である。

しかし、アンコール遺跡の一番の特徴は、そこが今もなおカンボジアの人々の信仰活動の実践の場として生きていることである。人々が住む集落や稲田と一体となったこの歴史的景観は、世界遺産アンコールの評価理由のひとつに挙げられている。

上智大学アンコール遺跡国際調査団は、1991年からアンコール遺跡群のひとつであるバンテアイ・クデイで考古調査を続けている。「カンボジアの人によるカンボジアの人の為の遺跡保存」をポリシーとし、カンボジア人若手研究者の養成に取り組んできた。また、遺跡近隣の地元住民ともっと深く連携することを目的とした発掘現場見学会を1998年から企画し、考古文化財の普及活動にも力を入れている。この見学会は2008年からは「カンボジアの人と楽しむ文化遺産」と銘打ったカンボジア政府との共催プログラムに発展し、村の人たちを招待して先ず最初に発掘現場、それから出土遺物が展示された博物館、そして最後に遺跡修復現場を見学する文化遺産理解ツアーが実施されている。

また、調査側からの一方的な情報発信だけではなく、地元住民からの口頭伝承聞き取り調査を通じて、彼らにとっての「遺跡」や「地域」の意味を何かを考えてきた。

カンボジアでは、まだまだ一般市民が考古調査や活動に参画するという段階には至っていない。しかしこうした草根の普及活動と相互交流が、将来に向けての萌芽になっていると確信している。